善隣

No.540 通巻807

2023年（令和５年）10月１日発行（毎月１日発行）

2023 10

一般社団法人 国際善隣協会

長寿祝賀会（新橋亭新館にて。９月14日）

善隣　目　次　2023年10月号

公開講演会記録

歴史に翻弄された溥儀、溥傑兄弟の生涯
『転生―満州国皇帝・愛新覚羅家と天皇家の昭和』……牧　久　2

沖縄基地問題の新局面
―米軍基地の過重負担からアジアの外交・安全保障へ……目黒　博　10

数奇な『入来文書』の運命
―朝河貫一の発見はなぜ埋没したのか？ ……矢吹　晋　20

陶々俳壇 ……馬場由紀子　29

中国ウォッチング ……編・訳　上松玲子　30

協会通信・会員だより・同好会だより …… 32

2023年10月の行事予定 …… 33

みんなの写真館 …… 32
（姜晋如、藤沼弘一）

善　隣　第540号　通巻807号
2023（令和５）年10月１日発行
発行所　〒105-0004　東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人　国際善隣協会
TEL　03（3573）3051
FAX　03（3573）1783
発行人　藤沼弘一
編　集　原田克子
編集協力　朝　浩之、山谷悦子
印刷所　㈲ゆにおんプレス
TEL　048-834-1201
定価　一部400円　年額4,800円
振替　00120-0-145956
国際標準逐次刊行物　ISSN 0386-0345

ⓒ禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。
一般社団法人　国際善隣協会

公開講演会記録

歴史に翻弄された溥儀、溥傑兄弟の生涯

『転生―満州国皇帝・愛新覚羅家と天皇家の昭和』

ジャーナリスト　牧　久

私は歴史学者でも歴史研究者でもない。ひたすら事件・事故を追ってきた元新聞記者である。そんな私が、長年にわたって集めた史・資料を丹念に読み解き、満州国皇帝となった清朝のラストエンペラー・愛新覚羅溥儀と弟の溥傑の生涯を追ったノンフィクション『転生―満州国皇帝・愛新覚羅家と天皇家の昭和』（小学館）を上梓した。タイトルの「転生」とは「生まれ変わる」という意味である。溥儀、溥傑の生涯を追うと、歴史の荒波に翻弄され、あたかも長編の人間ドラマのように、次々と新しい〝人間〟に生まれ変わっていく姿が浮かび上がってくる。その数奇な生涯は小説の世界をはるかに超えていた。

「歴史の定説」への疑問

かつて私は「満州国」に関わった人物の評伝を二冊書いた。『不屈の春雷―十河信二とその時代』と『満蒙開拓、夢はるかなり―加藤完治と東宮鐵夫』である。「新幹線を作った男」として知られる元国鉄総裁の十河は、満鉄理事時代に関東軍参謀の石原莞爾と意気投合し、石原らが満州事変をきっかけに建国した「満州国」の長期経済計画の立案に携わった。一方、『満蒙開拓、夢はるかなり』は、厳冬期、零下四十度にもなる厳しい風土の満州北部を豊かな農村に変えたいという志を掲げて、それに取り組んだ寒冷地農業の研究者、加藤完治と彼を支援した東宮鐵夫の物語である。東宮は石原莞爾の部下でもあった。

彼らには、軍閥が割拠し内戦状態になっていた満州を中国本土から切り離し、理想の〝楽土〟を建設するという思いがあった。しかし、やがて満州国は変質し、ソ連軍の侵攻により、悲惨な終末を迎える。彼らの思いは「侵略

行為」として批判され、歴史の底に埋もれてしまった。二冊の執筆に当たって〝かつての満州国〟での現地取材を繰り返し、日本側だけでなく、満州国側の史・資料を多数集めたが、文献類のほとんどは執筆に生かせず、書棚に積み上げられたままになっていた。

そうした文献を読み返してみると、今度は満州国を日本側からでなく、満州国皇帝となった〝ラストエンペラー〟、愛新覚羅溥儀とその実弟、溥傑の眼を通して記述したい、という思いが募った。私が住む千葉市・稲毛には陸軍歩兵学校に通っていた溥傑が公家の娘、嵯峨浩との新婚時代に半年間を過ごした住居がそのまま保存されていて、この仮寓をしばしば訪れるようになったことも執筆の強い動機の一つになった。

「満州国」はご承知のように、中国の東北部、万里の長城の向こう側に存在した国家である。昭和七年に建国され、終戦の年の昭和二十年八月に消滅した。国家として存在したのはわずか、十三年五か月。満州国は満州事変を起こした関東軍が、清朝のラストエンペラー・溥儀を拉致同然に連れ出し、皇帝に担ぎ上げた日本の「傀儡国家」だったというのが、私たちが教わった歴史の〝定説〟になっている。満州国皇帝となった溥儀と弟の溥傑は、〝傀儡師〟である関東軍の意のままに操られ、踊らされただけの〝木偶の坊〟に過ぎなかったのだろうか。「満州国」は今の中国では〝偽満洲国〟と呼ばれ、日本軍の中国侵略によってできた「うそ、偽りの国家」としてその存在は否定されている。それはなぜか？　満州国の存在を認めると、その国家を潰したのはだれか、という議論に発展するからであろう。私は「満州国」について、これまでの定説に囚われることなく、溥儀・溥傑兄弟の生涯を描くことによって「満州国」とは何だったのか、を追求してみたいと思った。

清朝復興を目指した溥儀兄弟

日本の昭和初期、東北地方では冷害が続き、食べられない農家の次男、三男たちが満州の最北端まで行って凍土を開墾して農業を始めた。私は『満蒙開拓、夢はるかなり』でそうした開拓民の姿を描いた。その取材では哈爾浜（ハルビン）から夜行列車で八時間、ロシア国境に近い終点の佳木斯（ジャムス）で降り、日本人開拓民が最初に入った弥栄村、千振村を訪れた。その当時、満州とはどんなところだったのか。作家、小川哲氏の直木賞を受賞した『地図と拳』（集英社）は満州で最初に地図を作り、都市を建設した日本人の物語である。その小説の中に当時の満州の状況を表すうまい表現がある。

「満州は少しずつ発展していたが、すべてが思ったように進んでいたわけではなかった〔中略〕辛亥革命によって清は滅び、中華民国が誕生していたが、彼らも広大な満州の統治に苦心していた。満州はまだ、誰のものでもなかった。広大な白紙の地図を、馬賊がゲリラ的に埋めていた。台頭した馬賊が別の馬賊に敗れ、勢力圏は目まぐるしく入れ替わった。日本が、支那が、そしてロシアや諸外国が有力な馬賊を懐柔しようと試み、それに成功したり失敗したりした」。

昭和六年九月の満州事変を主導した関東軍参謀・石原莞爾は、当初「満蒙問題の解決はわが領土とする以外にない」（「満蒙問題私見」）という「満蒙領有論」だった。だが年が明けた昭和七年になると、彼は「満蒙各民族による自治国家建設」へとその考えを変えていく。「第一の理由は満蒙各民族には自治能力があることを知ったことだ」と彼は後に述懐している。新国家建設を協議した「東北最高行政委員会」には、張作霖亡き後、〝満州四巨頭〟と呼ばれていた張景恵、馬占山、臧式毅、熙洽らが集まった。実力者で参加しなかったのは、父親の張作霖が殺され、蔣介石と手を結んだ張学良だけだったと言ってもよい。四巨頭は新国家が建設されるとそれぞれが閣僚級の重要ポストに就いた。

関東軍に拉致同然に満州へ連行され、皇帝の座についたとされる溥儀だが、彼には逆に「関東軍を利用して清朝を再興する」という強い思惑があった。ご承知のように清朝最後の皇帝「宣統帝」が溥儀である。溥儀は二歳で皇帝となり、六歳の時に起きた辛亥革命で皇帝の座を降りた。清朝の復興には強い軍隊が必要になる。溥儀の強い願いを実現するために、日本に送り込まれたのが弟、溥傑だった。昭和四年に来日した溥傑は四年間、学習院で学んだ後、陸軍士官学校に入り、優秀な成績（銀時計組）で卒業する。さらにその後、千葉にあった陸軍歩兵学校、さらに陸軍大学へと進み、満州国軍の優秀な士官となった。

溥儀の側近たちの証言

溥儀・溥傑に関する史・資料について述べておきたい。溥儀は『わが半生―「満州国」皇帝の自伝』、溥傑は『溥傑自伝―「満州国」皇弟を生きて』という自伝を書き残している。これらの自伝は二人が戦後、中国・撫順の戦犯管理所に収容され、思想改造教育の一環として自分の半生を綴った「認罪書」がその〝原典〟である。出版時に事実関係の再確認はなされたとはいえ、二人がその時々になぜ、そのような行動をとったのか、どう思ったのか、などについてはチェックされていないし、確認のしようがない。もちろん、事実の歪曲も含まれている。『溥傑自伝』はかなり正確に記されているが、『わが半生』には自己を正当化するためのウソがたくさんある。

そこで重要になるのは、彼の〝腹心〟だった人物たちが語る証言である。満州国で溥儀が信頼した日本人が三人いた。一人が満州浪人の工藤鉄三郎。溥儀から〝忠〟という名前を与えられるほど側近中の側近だった。青森県出身の工藤は若き日、陸羯南の感化を受け、サハリンから中国大陸にわたり、飴売りなどで生活費をかせぎ、中国語を身につける。溥儀が大正六年、「張勲による復辟（退位した君主が再び位につくこと）」で十二日間、皇帝の座についた時、溥儀に接近して信頼を勝ち得、満州国が建国されると、侍従長相当のポストについた。彼は戦後『皇帝溥儀』を上梓するが、そのサブタイトルは「私は日本を裏切ったか」である。

上海の東亜同文書院出身で、外務省のノンキャリア通訳だった林出賢次郎は

「日満議定書」の調印式での通訳に当たったが、その見事な通訳ぶりに溥儀がほれ込み、請われて満州国に出向し、溥儀と日本人との会見の通訳を務めた。そのやり取りは「極秘」とされたが、林出は外務省に密かに要請され、「厳秘会見録」として外務省に送り続ける。林出が通訳を務めた五年間の全記録が今も外務省外交史料館に保存されている。

もう一人、溥傑が陸軍士官学校在学中、教官として彼を指導した吉岡安直（終戦時、中将）がいる。溥傑は在学中、休日になると吉岡の自宅を訪問、吉岡夫妻を実の両親のように慕った。その縁もあって溥傑が帰国すると満州に渡り、溥儀の御用掛と関東軍参謀を兼務し、溥儀の信頼も厚かった。しかし、終戦後、ソ連の捕虜となった溥儀は、東京裁判にソ連の証人として出廷。「私が満州国皇帝として語ったことは、すべて吉岡が書いたものだ。吉岡は常に背後から私に短銃を突き付け、読むことを強制した」と繰り返し〝証言〟する。当時、吉岡は溥儀たちと切り離され、戦犯としてモスクワの獄中にあり、そんな証言も知らずに寂しく獄中死する。

溥儀最大の錯覚「天皇は兄弟」

溥儀は満州国皇帝になって日本を二度、訪れている。最初が昭和十年四月。日本は大連まで迎えの戦艦「比叡」（艦長・井上成美大佐）を送り、横浜に上陸した溥儀一行を東京駅では天皇陛下以下各皇族、全閣僚が出迎え大歓迎する。この日本訪問に同行した通訳の林出賢次郎は全行程を詳しく書き残している。

溥儀が日本滞在中もっとも感銘を受けたのは、大宮御所で溥儀を歓待した貞明皇太后である。母親の愛情を知らずに育った溥儀は、貞明皇太后の心のこもった歓待に「私はついに最大の錯覚を起こした」と述べるほど、貞明皇太后を母親と思うようになったのである。そして清朝復辟という長年の夢は「日本の天皇家との一体化」に向けて走り始める。帰国した溥儀は「訪日から帰国して国民に与える書」を渙発、「朕は日本天皇陛下と精神一体の如くである」と述べた。これに異議を唱えたのが清朝時代からの腹心で、清朝復活を志してきた鄭孝胥総理である。溥儀はすぐさま鄭総理を解任し、新総理に張景恵を指名した。彼は満州馬賊の一人で、張作霖と義兄弟の契りを結んで行動を共にし、張作霖爆殺事件が起きた時には、同じ列車に同乗しており、重傷を負ったが命は助かった。満州事変が起きると関東軍に協力、満州建国の功労者の一人となった。

二度目の訪日は昭和十五年六月である。この訪日で溥儀は「天皇と兄弟の証」である三種の神器を強く所望する。訪日に先駆け、御用掛の吉岡安直を東京に派遣、日本政府や宮内省と交渉させた。しかし、天皇をはじめ日本側はこれを断った。断られた吉岡は、京都の鏡師に銅鏡の製作を依頼して帰国する。溥儀は『わが半生』に「天皇に三種の神器を見せられた」と記し、「こんなものは北京の骨董市にいけばいくらでもある」と書いている。この時、天皇が溥儀に与えたのは太刀一振りと襖絵一枚だった。

溥儀は帰国途中、伊勢神宮に立ち寄

り、吉岡が京都の鏡師に作らせた銅鏡のお祓いを済ませ、帰国後、新京に建設した「建国神廟」に祀った。この建国神廟も日本が溥儀に天照大神を押し付け、祀らせた、というのが日本での定説となっている。溥儀には「天皇と兄弟なら、天皇に忠実な日本人官吏も軍人も自分にひれ伏すだろう」という思惑があったのである。

満州国を建国した関東軍では、新国家を維持・継続させるために溥儀の後継が大きな問題になる。溥儀は十四歳で婉容と結婚、側室に文繡を迎えたが、彼は女性に興味がない。苦しんだ婉容はアヘン中毒となり、文繡には離婚訴訟を起こされ敗訴する。後継の子どもが生まれることは絶望的であった。関東軍は溥儀の後継者問題に頭を悩ませる。そこで浮上したのが弟・溥傑の結婚問題である。

関東軍は溥傑と日本人女性を結婚させ、男の子が生まれたら次の皇帝とする、という陰謀をめぐらせた。選ばれたのが嵯峨家の長女・浩である。嵯峨家は明治天皇につながる家系である。政略結婚（昭和十二年）だったが、二人は見合い写真で互いに一目ぼれし、終生、「相依為命」（相依って命を為す）というほど相思相愛の仲になる。二人の子どもが生まれたが、二人とも女性であり、長女・慧生は学習院大学二年生の時、天城山中で同級生と心中、全国的に大きな話題となった。

溥儀たちをソ連に売ったのは誰？

昭和二十年八月九日、ソ連軍の満州侵攻が始まると、満州国は首都を朝鮮との国境に近い山中に移した。日本の敗戦が決定的になると、溥儀一家は近衛文麿なども動いて京都に亡命することになる。迎えの飛行機は同十九日、朝鮮の平壌に来ることになっていた。だが、直前になって奉天に変更される。溥儀一行が三機の小型機に分乗して奉天に到着すると、飛行場にはソ連機が待っていた。溥儀一族は全員がソ連軍の捕虜となり、ハバロフスクの収容所に連行される。誰が溥儀一行の動きをソ連軍に密告したのか。溥儀一行の行先変更を指示したのは関東軍総司令部だった。

当時、満州では関東軍総司令部がソ連軍と終戦交渉をやっていた。日本側は秦彦三郎総参謀長と瀬島龍三ら三人の参謀だった。この終戦交渉の過程で彼らが溥儀一族をソ連に売ったとみて間違いないだろう。瀬島はソ連に十年間抑留され、帰国してから伊藤忠商事の会長にまでなる。しかし彼は、抑留中に何があったのか一切語っていない。瀬島はソ連のスパイだったのではないか、という説が濃厚に残っている。

ハバロフスクの収容所で溥儀らは満州国の歴史をまとめるように要求される。ソ連当局が溥儀を東京裁判に検察側証人として出廷させ、関東軍幹部を傀儡師に仕立てあげるための準備だった。溥儀は昭和二十一年八月十六日から計八日間、東京裁判の証人席に座り、前述したように「満州国皇帝としての発言は、すべて御用掛の吉岡中将に強制されたものだ」と繰り返した。溥儀は手にしたメモを読み上げるケースも多く、裁判長から「法廷の許可がなければ書いたものを見ることは許されない」と再三、注意される。こうしたソ

連に強要された溥儀の証言は、連日、新聞各紙で大きく報道された。「満州国は日本軍が溥儀を脅して皇帝に祭り上げた傀儡国家」という戦後の日本での定説は、東京裁判での溥儀証言が大きな〝役割〟を果たしたと言えるだろう。

撫順戦犯管理所と周恩来

中国本土での内戦に勝利した毛沢東の共産党軍が「中華人民共和国」（中国）を建国すると、ソ連との間に「中ソ友好条約」が結ばれる。ソ連軍の捕虜となりハバロフスクの収容所で五年間を過ごした溥儀、溥傑ら満州国関係者約六十人と古海忠之（国務院総務庁次長）ら日本人捕虜九百六十人は、撫順に設置された「戦犯管理所」に送り返される。この管理所の総指揮をとることになったのが周恩来総理で、「国家政策」として「戦犯の思想改造」が行われることになった。

その基本となったのが毛沢東の「改造教育を実践し、正しい考え方・思想を正しい方法で教育すれば人間は変わる」という思想である。戦犯管理所で溥儀や溥傑に最初に命じられたのが「自伝」を書くという〝任務〟だった。「思想改造では客観的にこれまでの生き方を反省すべきであり、それには自伝をきちんと書くことだ」という基本方針があった。『わが半生』や『溥傑自伝』はこの改造方針に従って書いた「自伝」が〝原典〟となっている。

管理所側は絶えず「学習会」を組織、マルクス・レーニン主義の著作を学習させた。頭脳明断な溥傑はそうした学習を通して、かつての思想と行動を反省し、「共産主義国家・中国」の一員へと変貌をとげ、満州国関係者の「学習組長」に任命される。さらに毎日四時間の労働時間も設定された。そうした一連の教育が終わると、最後に課せられたのが「告白・告発と罪の承認」だった。満州国関係者も日本人捕虜も、互いに自分の罪を告白し、また同僚だった者たちの罪を告発した。

大きな反響を呼んだ日本人の告白は、満州国国務院総務庁次長だった古海忠之の「満州国における日本のアヘン政策」だった。「日本軍は軍費を調達するために、満州国民にアヘンの植え付けを奨励、アヘン専売制度を設け、住民にアヘン吸引を勧め、満州国の財政収入の六分の一をアヘンが占めるようになった」などと告白したのである。古海の告白が終わらないうち、日本人戦犯たちの間では野次と怒号が飛び交ったという。

戦犯管理所の「起訴案」では極刑（死刑）が七十人に上っていた。この案を見た周恩来は「日本人には一人の死刑もあってはならず、また一人の無期刑もあってはならない。有期刑もできるだけ少数にすべきである」と強い口調で諭した。この発言に反発が起きると、彼はこう諫めた。「日本人戦犯に対する寛大な処置について、諸君は二十年後にその正しさを理解できるだろう。侵略戦争を行った人たちが十分に反省し、その体験を日本の人たちに話せば、われわれ中国共産党員が話すより日本人民も納得するだろう」。日本人に対する判決は起訴された二十八人のうち、古海ら四人が懲役十八年、その他が十六年から十二年の実刑判決だった。この刑期にはソ連抑留の五年間も含まれている。

当時、毛沢東に次ぐナンバー2だった周恩来は十九歳の時、日本の大学に入学することを夢見て来日、神田で下宿生活をしながら日本語を学び、第一高等学校、東京高等師範学校を受験するが、最初の年は入試に失敗する。再度の挑戦を目指して予備校に通いながら読んだのが京都帝国大学教授・河上肇が主宰する雑誌『社会問題研究』だった。周恩来はこの雑誌の熱心な読者になり、「マルクス主義」への理解を深めていったという。当時、中国語に翻訳されたマルクス・エンゲルスの著作はなく、周恩来はまず、日本語で「マルクス主義」に接したのである。

溥傑と浩、十六年ぶりの再会

昭和三十四年九月、溥儀に「特赦令」が伝えられる。「特赦」とは起訴・判決を経ないで出獄することである。溥儀はソ連での五年間、さらに撫順の戦犯管理所で九年間を過ごし、ようやく新中国の公民となった。だが、溥傑の釈放はさらにもう一年、引き延ばしにされる。溥傑は新中国への理解は溥儀以上に進んでいたが、彼は妻、浩への思いが断ち切れなかった。溥儀は管理所を出る前夜、溥傑にこう言った。「君の問題は日本人妻のことだと思う。浩は特務（スパイ）に違いない。今回、特赦が許されなかった理由は日本人妻の問題を処理しなかったからだ」。溥傑は涙ながらに溥儀を見送った。溥傑の特赦は翌三十五年十一月のこと。溥傑はソ連抑留五年、撫順の戦犯管理所で十年。通算すれば十五年という長い収容所生活だった。特赦を受けた溥儀は当初、周恩来の斡旋で「北京植物園」で働いていた。溥傑も同じように「景山公園管理処」で働き始める。二人はやがて国政への助言機関である「人民政治協商会議」内に設置された文史資料研究委員会の「文史専門委員」に任命される。二人の仕事は史料を整理し「歴史史料」として残すかどうかを判断することで、二人にはうってつけの職場だった。溥儀、溥傑は清朝に関する資料を審査する責任者に指名される。「満州国」の歴史の著述では、二人はよき協力者になった。

溥傑の特赦を知った妻・浩はすぐに溥傑あてに手紙を書く。手紙には溥傑に対する思慕の情と中国への帰国を願う思いが込められていた。しかし、浩を日本の〝特務〟だと思い込んでいた溥儀は浩の帰国に反対する。そんな溥儀を説得し、浩の帰国に協力したのが周恩来だった。浩は溥傑と結婚した際、満州国籍を取得、敗戦後、帰国してからは「在日華僑」として暮らしていた。昭和三十六年五月、浩は次女の嫣生と共に香港経由で溥傑が出迎えた広州に向かう。浩の手には天城山で同級生と心中した慧生の遺骨が抱えられていた。二人にとって十六年ぶりの再会だった。

日中国交回復と天皇・皇后の訪中

浩が溥傑と再会して五年後の昭和四十一年、中国では毛沢東による文化大革命が激化する。元満州国皇帝・溥儀は紅衛兵たちの標的となった。体調を崩した溥儀は病院での診察も断られる。周恩来の背後からの援助で何とか入院するが、そこにも紅衛兵は押しかけた。その中には三番目の側室、李玉琴もおり、皇帝時代の溥儀を攻め立てた。溥

儀はそのたびに自己批判を繰り返す。溥儀の体力は日に日に衰え、翌四十二年十月、波乱の生涯を閉じた。享年六十一。最後の言葉は「もう一度、周総理に会いたいなあ」だった。溥傑、浩夫妻も紅衛兵の標的となったが、なんとかその攻撃を切り抜けた。

その頃から中ソ対立が激化、昭和四十七年二月には米国のニクソン大統領が訪中。日本でも一刻も早く中国と国交を結ぶべきだとの声が高まる。九月になると田中角栄首相、大平正芳外相らが訪中する。周恩来首相との間で調印された「日中共同声明」には「過去において日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省する」と記され、具体的な謝罪の言葉はなかったが、日本はこの調印により台湾との国交を断った。

両国の国交が回復すると、日中間は空路でも結ばれる。周恩来の意向を受け、溥傑・浩夫妻の訪日が実現する。周恩来は日本の皇室と直接対話できるのは溥傑夫妻だとよく知っていた。日中友好の最終的な実現には天皇・皇后の訪中が必要である。周恩来はその任務を溥傑夫妻に課した。溥傑は全国人民代表大会常務委員会委員となり、来日するたびに天皇・皇后と面会する。その結果、平成四年十月の両陛下（現上皇・上皇后）の訪中が実現した。

日本国内では、両陛下が訪中されれば「歴史に対する謝罪が要求される」として反対の声が強かった。溥傑は事前に来日すると「謝罪の言葉はいりません。謝罪を求めたら親善ではない」と進言する。それが天皇の「両国の永きにわたる歴史において、我が国が中国国民に対し多大の苦難を与えた不幸な一時期がありました。これは私の深い悲しみとするところであります」という天皇のお言葉となったのである。

最後になるが、歴史に「ＩＦ」はないという。その通りだが、「ＩＦ」を考えるのもよいかもしれない。もし終戦時に溥儀、溥傑が当初の計画通り日本に亡命していたら、どんな立場になっていただろう。「天皇と兄弟だ」という人物をＧＨＱのマッカーサー元帥は昭和天皇と同じように処遇したのだろうか。

歴史にはどこかの瞬間に右に行くのか、左に転ぶのか、といったことがたくさんある。歴史の定説になっていることが、すべて真実とは言えないのではないか。現在、我々が問われていることも多い。ウクライナでの戦争はどういう結末を迎えるのか。新憲法で「戦争をしない国」となった日本は、どう変化していくのか。今、我々は変化する世界の歴史のど真ん中にいると私は思っている。

（２０２３年６月15日・公開講演会）

筆者略歴（まき　ひさし）

１９４１年大分県生まれ。64年早稲田大学政経学部を卒業、日本経済新聞社に入社。その後、代表取締役副社長を経てテレビ大阪会長。

著書に『「安南王国」の夢―ベトナム独立を支援した日本人』（ウェッジ）、『昭和解体―国鉄分割・民営化30年目の真実』（講談社）、『暴君―新左翼・松崎明に支配されたＪＲ秘史』（小学館）など多数がある。

公開講演会記録

沖縄基地問題の新局面

――米軍基地の過重負担からアジアの外交・安全保障へ

ジャーナリスト　目黒　博

私はこの13年ほど沖縄を取材してきましたが、今、沖縄基地問題は新局面を迎えていると感じます。今日は、問題がどのように転換しつつあるかについてお話しします。

以前は、米軍基地は「迷惑施設」とされ、沖縄への過重負担が課題でした。しかし、今では、南西地域の防衛力強化の方針に沿って進められてきた、自衛隊基地の離島への配備に焦点が当たっています。つまり、迷惑施設の負担から東アジアの安全保障へと、沖縄基地問題の性格が大きく変わったのです。

現在の新しい状況をお話しする前に、これまでの基地問題の経緯を振り返ります。普天間飛行場の辺野古移設問題についてはご存知でしょうから、ポイントだけ述べます。

「迷惑施設」米軍基地の沖縄への集中

面積が日本全体の６％しかない沖縄に、在日米軍基地の70％が存在します。米軍基地は沖縄本島の中部から北部に集中し、沖縄本島の15％、沖縄県全体の８％を占めています。

旧日本軍は来るべき「決戦」に備えて、沖縄各地に飛行場や基地を建設しました。飛行場などの建設が容易な平坦な畑地などが優先的に収用されましたが、沖縄戦の後、今度は米軍がその土地を接収しました。そのため、現在の米軍基地の大半は、平地か、なだらかな丘陵地帯にあります。戦前は畑地や住宅などが存在した優良な土地だった所です。

しかも、多くの沖縄県民にとって米軍基地は、まずは、極端な騒音、軍用機の墜落事故、ＰＦＯＳ（有機フッ素化合物）と呼ばれる有毒物質の流失、

米兵の犯罪などを発生させる迷惑施設でした。ここで注目されることは、米軍基地は「安全保障」というより「危険性」の問題だったことです。

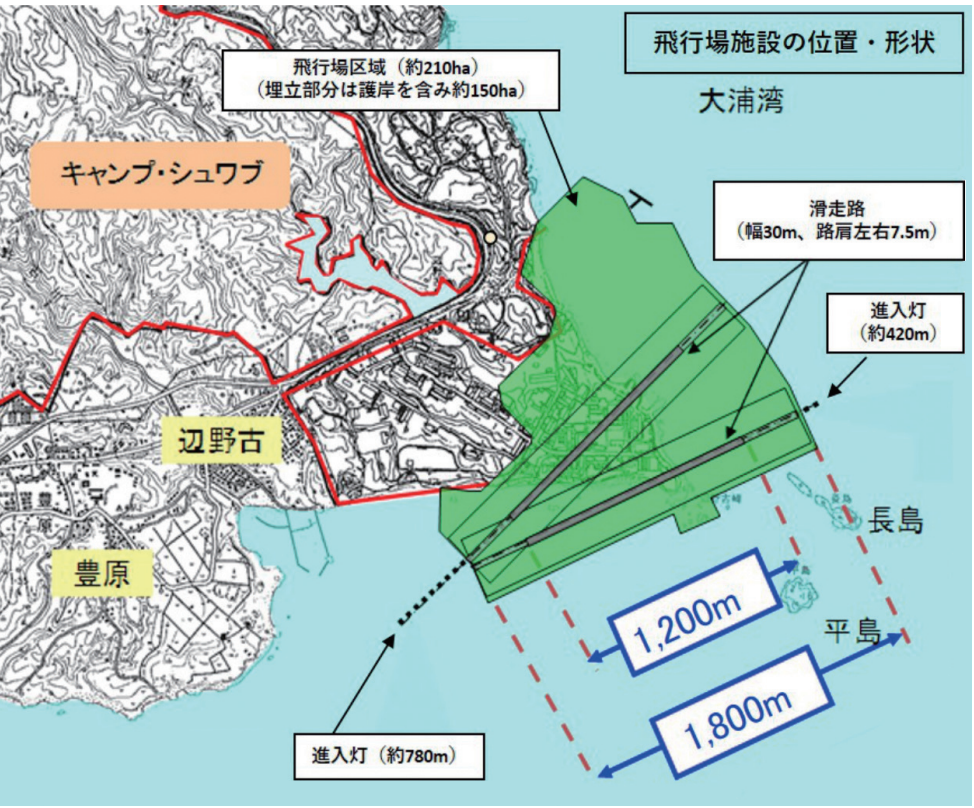
海兵隊普天間飛行場の辺野古移設問題

１９９５年に起きた３人の米軍人による少女暴行事件がきっかけとなり、米軍基地への反発は頂点に達します。慌てた橋本龍太郎首相とウォルター・モンデール米国大使は、翌年県民の憤激を和らげるべく、「普天間飛行場の返還」を発表しました。しかし、県民が歓喜に沸いたのも束の間、同飛行場の移設先が未定であることが明らかになります。その後、さまざまな移設案が浮上しては消え、最後に残ったのが、名護市東海岸の辺野古崎の南岸と北東岸（大浦湾側）を埋め立て、Ｖ字型滑走路を建設するというものです（図１参照）。

この案の最大の問題は、北東岸が深い海であることです。最も深い海底は70ｍに達し、その一部には、さらに20ｍの軟弱地盤があります。なぜ、深い海岸の埋め立てという非合理な計画が決まったのか。砂利利権が絡んだからです。膨大な砂利を使う工事は、業者にとっては願ってもないことでした。軟弱地盤を根拠に、県は埋め立て工事の設計変更を認めず、現在裁判闘争に至っています。裁判では最終的に国が勝訴することが確実視されますが、判決後、埋め立て工事を始めてから完成まで最低12年はかかるとされるなど、移設工事の目途は立っていません。

小泉純一郎政権末期の２００６年に策定された辺野古崎埋め立てＶ字型滑走路案は、唯一の選択肢とされました。２００９年に登場した鳩山由起夫民主党政権は、突如それを覆し、「最低でも県外移設」を唱え、沖縄県民は感激しますが、鳩山氏は辺野古に代わる移設

図１　辺野古崎埋め立てV字型滑走路計画



防衛省HP「『在日米軍に関する諸施策』普天間飛行場代替施設」より転載

先を準備していませんでした。迷走した同政権は、県外移設を撤回し、辺野古案に回帰します。その後の菅直人・野田佳彦両政権もそのまま辺野古案を踏襲し、県民を落胆させます。沖縄県は埋め立てを承認せず、膠着状態に陥り、２０１２年に民主党政権は崩壊しました。

「オール沖縄」陣営の形成と安倍政権の強硬路線

その後登場した第２次安倍政権は、仲井眞弘多沖縄県知事から埋め立て承認を得て、辺野古案を「粛々と」進めようとします。その政権の方針への県民の強い拒否感を背景に、保守系大物の翁長雄志那覇市長（当時）が、辺野古移設反対と「地元の民意」を掲げて、保革相乗りの「オール沖縄」を形成しました。２０１４年、翁長氏は知事選で仲井眞氏に圧勝します。

しかし、「オール沖縄」には三つの問題がありました。一つは、保守系や経済人たちと革新勢力との間の溝が深く、事あるごとに内紛が起きたことです。特に、保守系の共産党アレルギーは根深く、翁長氏の側近集団、元自民党系那覇市議団「新風会」は、後援会が崩壊するケースもあり、翁長県政発足後の３年弱の間に、所属議員は12名から３名に激減します。水と油のように体質が全く異なる政治勢力の連携には、そもそも無理がありました。

翁長知事は、選挙では強力な組織を持つ共産党に依存せざるを得ず、政策面でも妥協を余儀なくされます。北部訓練場の半分が返還された際には、東村高江集落に代替となるヘリパッド建設が進みますが、この件で翁長氏は「整理・統合・縮小」による基地負担の軽減策を是とする自説を曲げ、共産党などの主張に屈します。そのような状況が進み、保守系の脱落が相次いで、陣営内の革新系の比重が増していきました。

第二に、「オール沖縄」陣営の基地問題への立場に相違が目立ったことです。辺野古移設反対、海兵隊基地全面撤去、米軍基地撤去、基地はすべて撤去など、さまざまな立場のグループが集まっていたうえに、同一人物が、時にはその立場を微妙に変えるなど、感情ベースの運動の危うさもありました。

第三の問題は、辺野古案に対する代替案を提起しなかったことです。これは致命的でした。安倍政権は、辺野古移設は普天間返還の唯一の選択肢であるとしました。一方の「オール沖縄」はそれを全面的に否定しましたが、代替案を模索しようとせず、「代替案は政府が示すべきだ」と主張したのです。「辺野古案が唯一」と主張している政府に対して、「代替案があるはずだから考えよ」という論理は通用しません。ところが、「オール沖縄」勢力はその立場を変えませんでした。結局、この運動は、政府を糾弾する闘争、「ゼロか百か」の玉砕路線の色彩を帯びていきます。

一方、安倍政権で沖縄を担当した菅義偉官房長官は、沖縄を理解しようとする姿勢を一切見せず、強硬路線を貫きました。翁長知事と対談した菅氏

は、「私は戦後生まれなので、歴史を持ち出されても困ります」「戦後は日本全国が悲惨な中で、みんな大変苦労してきた」のであって、沖縄だけが特別ではないことを強調しました。広島や長崎でも、彼は同じ発言をできるでしょうか。沖縄戦は、日本政府が米国に「一泡吹かせる」ことを目的とした「捨て石」作戦でした。その結果、県民の4人に1人が無残な死を遂げました。その歴史を軽く無視する政府要人の姿勢には驚かされました。

ウクライナ戦争の衝撃と米中対立

2022年2月、ほとんどのロシアや軍事の専門家ですら予測しなかった、ウクライナ戦争が勃発しました。その結果、独裁者は非合理的な判断をしかねないという見方が強まり、「台湾有事」の可能性に言及する専門家が増えました。

台湾問題の背景には、激しい米中対立もあります。トランプ政権から始まった対中国強硬路線は、バイデン政権も維持しています。共和党系は経済面での中国の台頭を憂慮し、民主党系は人権抑圧に反発します。また、米国全体に、中国の急速な軍拡への懸念が広がりました。米国指導層の中に、中国の経済発展に協力すれば自由を求める市民層が育ち、民主化が進むだろうという、楽観的な期待があり、中国への協力を惜しみませんでした。ところが、今や米国に代わって世界随一の超大国、覇権国家になることを目指す習近平という独裁者が現れ、「中国に裏切られた」と考える米国人が圧倒的に多い状況です。

ウクライナ戦争が始まり、欧米諸国や日本などはロシアへの経済制裁を実施していますが、中国は実質的にロシアを支援しています。そのため、経済制裁は形骸化して米国指導層の中国への憤りは収まりません。米中対立はしばらく続きそうです。

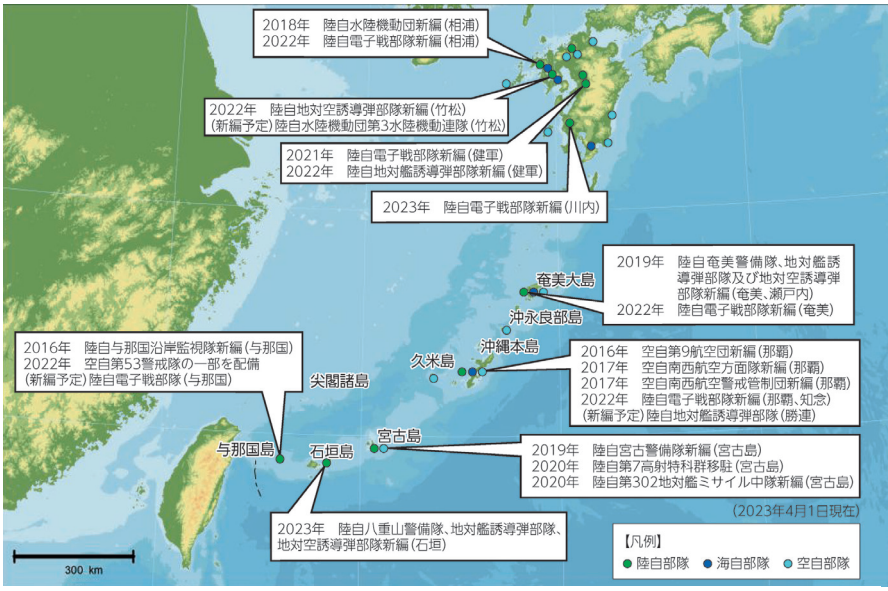
米国による対中国包囲網、世界経済の低迷、さらに国内要因も重なって、中国経済は停滞しています。にもかかわらず、中国は外交面では強気です。その理由の一つはグローバル・サウスと呼ばれる、インド、ブラジル、サウジアラビアなどの非欧米諸国の多くが、米国の対中国政策を支持しないからです。

人権を重視し、自由で開かれた国際秩序を唱える米国ですが、正当性のないイラク戦争を始めて中東の秩序を破壊し、内戦を誘発させました。その結果、イラクからシリアにまたがる地域でISが台頭し、膨大な難民が発生しました。アフガニスタンでも、突然米軍撤退が実行され、米国は多くのアフガン人を見捨てました。そのような米国が、「人権」や「自由」を振りかざすのは二重基準だという中国の主張は、米国からさまざまな圧力をかけられてきたグローバル・サウス諸国の共感を呼ぶのです。

自衛隊の先島諸島への配備

米中間、中台間の緊張が増して「台湾有事」の可能性が語られ始めた時、奄美から沖縄諸島などの南西地域への

図２　九州・南西地域における主要部隊新編状況（2016年以降）（概念図）



令和５年版防衛白書 p.282 より転載

自衛隊配備が進んでいました（図２参照）。この方針自体は、民主党政権時代の２０１０年頃から計画されたものです。しかし、米軍基地が存在しなかった先島諸島（宮古、石垣、与那国など）に次々と自衛隊基地が開設される事態に、多くの島民が動揺しています。これまで辺野古問題を軸に重要選挙が戦われ、やっとコロナ明けで観光客が戻ってきたと思ったら、いつの間にか自衛隊基地ができている、という感覚が幅広い県民層に共有されました。とはいえ、この問題に対する県民感情は複雑です。

沖縄は県域に尖閣諸島を抱え、中国の軍拡には敏感です。また、自衛隊に対しては、自衛隊ヘリによる急患搬送もあり、肯定的な印象を抱く県民は多いです。反面、沖縄戦の記憶も残り、自衛隊の離島への配備が中国を刺激するのでは、と恐れる声もあります。特に、ミサイル部隊配備に対しては不安を感じる人が少なくありません。政府が昨年閣議決定した安保３文書などで、反撃能力（敵基地攻撃能力）の保有を語り、一部ミサイルの長射程化による反撃能力の向上を計画していることも、懸念材料になっています。

沖縄では若い世代ほど自衛隊に対してポジティブな意見を持ちますが、高齢者は警戒感を抱く傾向があります。と同時に、自衛隊配備への賛否が明確でない人が多いのも事実です。その背景には、「沖縄戦の記憶」と「中国への警戒」の相克があるほか、地域や安全保障に関する客観的な情報が十分提供されてこなかったこともあります。沖縄には、中国、台湾、朝鮮半島の専門家がほとんどいません。県が万国津梁（あらゆる国との交流を目指す精神）を謳う割には、県内の大学は、東アジア地域研究の専門家を育成してきませんでした。中国や台湾の専門家がいなければ、県民が東アジア情勢に関する多様な情報を得る機会は限られます。

他方、沖縄で安全保障を真正面から議論するのはなかなか難しいことです。沖縄戦があまりに無残であったために、軍事や安全保障の議論への強い抵抗があるからです。

八重山諸島が経てきた苦難と自衛隊配備

南西地域における防衛力強化が進

み、にわかに八重山諸島（与那国、石垣など）にスポットライトが当たっています。

与那国は台湾から１１０㎞の場所にあり、戦後間もなくは台湾との密輸の拠点として繁栄し、最盛期には人口が約１万２０００人に達しました。しかし、密輸取り締まりが厳しくなって人口減が続き、今では自衛隊関係者を含めて約１７００人が住んでいるにすぎません。人口減が止まらない原因の一つは、高校がないことです。他の小さな島と同様、中学卒業生は高校進学のために島を出ます（「15歳の春」）。与那国には仕事が少ないため、ほとんどの若者は島に帰ってきません。

前町長の外間守吉氏や町役場は、台湾との交流による町の活性化を考え、直接往来を可能にするための特例措置を政府に要請しました。しかし、空港と港湾の規模が小さくＣＩＱ（税関、出入国管理、検疫）の基準を満たさない、との立場を政府は変えませんでした。現在、最も台湾に近い与那国の町民は、台湾との往来には石垣か那覇を経由しなければなりません。外間氏は、人口増のための苦肉の策として自衛隊誘致を提唱し、島民はその提案をめぐって二分されます。町長選や住民投票で誘致派が勝利し、２０１６年に、自衛隊が駐屯しました。

与那国に配備された自衛隊は当初、監視部隊でした。その後追加された航空自衛隊の警戒隊（レーダー基地）も攻撃的ではないと考えられ、一部の町議が配備反対から容認に転じて、反対派の勢いは弱まりました。ところが、最近、電子戦部隊のほか、地対空ミサイル部隊が設置されることが明らかになり、容認派も困惑します（図３参照）。このミサイルは航空機を迎撃するもので、攻撃性はありません。しかし、いつの間にか、次々と部隊が追加されてきたため、政府に対する不信感が深まりました。本年（２０２３年）５月には防衛省などによる住民説明会が開催されましたが、不安の声は収まっていません。この島は、東西10㎞、南北４㎞の小さな島です。いざ戦争になれば、逃げ場はありません。しかも、隣の石垣まで１３０㎞も離れており、有事の際の島外への避難も困難です。

石垣でも、ミサイル部隊の配備は大きな反響を呼び、市議会や住民からの要求も出て、本年３月には説明会が実

図３　03式中距離地対空誘導弾（与那国駐屯地に配備予定）

「陸上自衛隊装備 Google フォト」より転載

施されました。しかし、その6日前に駐屯地はすでに開設されており、順序が逆になったためもあり、市民の納得は得られていません。

太平洋戦争の中で、沖縄戦が日本領土における唯一の陸上戦であることと、その悲惨さはよく知られています。あまり知られていないのは、八重山諸島においても空襲とマラリアによる多くの死者が出た事実です。空襲による直接死は178名。そのうえ、沖縄戦に備えて進駐してきた旧日本軍によって、住民はマラリアがまん延する山岳地帯に追い立てられ、その結果、3600名を超える島民がマラリアに罹患し死亡しました（「戦争マラリア」）。この戦争体験によって、「軍は住民を守らない」という伝説が生まれました。岸田文雄政権が、防衛力強化を猛スピードで進める一方、セットで整備すべき国民保護法は2004年に制定されたままであり、住民避難の体制整備は大幅に遅れています。そのため過去の記憶が蘇り、離島島民は、自衛隊配備を危惧するのです。

八重山でタカ派が台頭した背景

石垣と与那国に共通する問題の一つは、漁民の苦境です。豊かな漁場である尖閣諸島周辺では、中国海警局の公船が現れ、石垣の漁船は威圧されます。石垣や与那国の小さな漁船は台湾の大型漁船と対峙すると沈没する危険があり、漁具が絡まるなどのトラブルも起きています。漁民の立場からは、日本政府は、漁民の利益よりも外交を重視してきたように見えます。台湾側が有利な日台漁業取り決め（2013年）についても、地元漁民は不満でした。日本政府が、台湾側が尖閣領有を強調しない交換条件として、台湾に大幅に妥協したとされています。しかも、その交渉は漁民の頭越しに行われ、石垣や与那国の漁協関係者はフラストレーションを溜め込みます。

長らく、沖縄保守系の主流は、旧竹下派・現茂木派（旧経世会・現平成研）とのつながりが強く、経済中心主義で、外交面ではハト派です。また、沖縄全体では、衰えたとはいえ、反米反基地の革新系の勢力も伝統的に強いです。外交面での対中国・対台湾融和路線を支持してきた沖縄政界エリートたちに対し、一部の島民は激しく憤ります。その感情が、強硬な反中国派の中山義隆石垣市長と糸数建一与那国町長を誕生させたと言えます。

ただ彼らは、防衛省などから得た情報を議員や地元住民と共有しない、独断専行型の政治家です。そのため、保守系の中でさえ首長への不満が燻っています。

台湾有事や自衛隊配備に意外とクールな県民

沖縄全体を見ると、台湾有事や自衛隊配備については、少なくとも現時点では、本土で思われるほど県民の関心は高くありません。主力産業の観光業がコロナで大打撃を受け、「コロナ明け」とされる今でも、多くの人たちの生活は苦しく、「台湾や自衛隊どころではない」のが実態です。もちろん、

中国の軍拡や台湾有事が全く気にならないわけではありません。例えば、熊本博之明星大学教授が代表を務める「国際化と政治参加に関する研究プロジェクト」が実施した世論調査によると、「中国の軍事力増強は、日本にとって安全保障上の脅威であるか」との問いに対し、県民の8割が賛成しています（速報版、２０２３年６月公開）。

その反面、多くの県民は「戦争が起きたら沖縄は終わりだ」と考えます。そのため、平和外交や対話・交流に期待する声もありますが、そのような動きを見せる政治家や有識者への信頼感も高いわけでもなく、なかば諦めの境地にとどまっているようです。エリートたちへの期待が低いのは、彼らが庶民の生活には無関心のように見えるからです。特に「オール沖縄」陣営は、生活に関わるような将来ビジョンを練ってこなかったため、「誰も取り残さない」などの一般論に終始します。保守系も同様で、沖縄の将来について、説得力のある具体策は提起していません。

特に若者世代は、これから先の生活が不透明だと感じる人が多く、自衛隊配備に関わる論争には冷淡です。新聞やＴＶがこの問題を取り上げ、有識者たちがコメントしても、「生活の苦労を知らない上流の人々が勝手に騒いでいるだけ」に見えるのです。

激しい政治対立と本音を語らない県民

基地問題についての政治的対立が激しいために、多くの県民は本音を語りたがりません。コミュニティの中の人間関係の密度が濃いために、自分の意見がコミュニティの中で、あっという間に噂となって広がる可能性があり、発言には慎重になるのです。

また、特に辺野古移設に反対する活動家や有識者たちが、基地問題を客観的に考えようとする人に対して「どちらの立場かはっきりしろ」と迫るケースも目立ちます。私自身、「中立など認めない」と言われたこともあります。基地反対派の強硬な態度が、一般の県民に「この問題には関わりたくないし、発言したくない」と思わせる空気を作り出していることは見逃せません。また、反対派は賛成派や容認派を、逆に賛成派は反対派をなじり、互いに議論しない傾向もあります。基地反対派にせよ、反中国のタカ派にせよ、異なる意見を認めない雰囲気を作り出しているのです。

地元紙も含めて、多くのメディアの記者たちは、例えば、辺野古問題の「地元中の地元」である辺野古区の住民の話を丁寧に聞くことは稀です。住民たちは、記者との信頼関係を作らないうちは本音を語りません。しかも、この集落は保守系が強く、反対派の社論を掲げる地元紙の記者との付き合いは薄いです。問題は、記者たちが、反対とも賛成とも言わない（あるいは言えない）住民たちと時間をかけて付き合い、時には酒を飲みかわし、話を聞き続ける時間と労力を惜しむことです。彼らは時間に追われて記事を書くために、明快な意見を求めたがりま

す。また、座り込みや集会、記者会見、デモなど、「絵になる」風景を好みます。このようにして、人々の本心は潜ったまま、放置されてきました。

本土の革新系・リベラル系有識者の罪悪感と沖縄への関与

沖縄に対し、日本本土の革新系・リベラル系の有識者たちが罪悪感を抱き、沖縄の基地反対運動を応援するケースは非常に多いです。その代表例は、今年3月に亡くなった大江健三郎氏です。

逝去直後、彼の沖縄との関わりを振り返る記事が数多く出ました。彼は2015年6月に辺野古を訪れ、工事車両を止めるため辺野古ゲート前に座り込む人たちを訪れて激励し、工事現場を海から視察しました。その件に触れた記事は、興味深いものです。『沖縄タイムス』紙は「沖縄のことを伝える上で大きな力だった」という「オール沖縄」関係者の声を取り上げました。また、『琉球新報』紙は、彼が「市民の粘り強い運動に感銘を受けている」と語ったとの記事を掲載しました。おおむね、大江氏の行動を肯定的にとらえる記事が多かったと言えます。

しかし、彼は、ゲート前の座り込みなどの活動に、地元住民がほとんど参加しないことを知らなかったようです。大江氏は、地元反対派の代表的な人物に会いませんでした。実は、その存在すら認識していなかったようです。もちろん、当時すでに八十歳、体調も悪かったので、辺野古区がどのような地域なのか、活動家たちと地元民との関係があまり良くないことなど、知る由もなかったのでしょう。

強硬な左右の本土文化人たちと「沖縄のブランド化」

往々にして本土の有識者たちは、沖縄の内部で実際に起きていることへの認識が浅いまま、「自らの良心」に基づいて、沖縄について発言し、行動するケースが多いようです。大江氏は、温和な方なので、それほど問題ではありませんが、攻撃的になる人もいます。反基地派の活動家に焦点を当てたドキュメンタリー映画の制作者は、その典型です。私は、都内の大学で行われた映画の上映会に、偶然居合わせました。上映後、複数の学生が「この映画には反対派ばかり出てくるが、なぜ賛成派が出てこないのか」という疑問を述べました。本質を突いた問題提起でしたが、その制作者はそれには答えず、「君たちがそんな態度でいるから、基地問題は解決しないのだ」と逆上したのです。

本土から沖縄に移り住むジャーナリストや学者の中には、このような「反基地原理主義」のような、強硬な姿勢を示す人が少なくありません。そのような人々の言動に、中国の文化大革命と似た、異論や疑問を封じ込め、正義のためなら「つるし上げ」も正当化されるという、極端な倫理主義を感じます。そのような一部文化人たちの言動が、沖縄の活動家集団を「勇気づけ」ている面もあります。その傾向が強まれば強まるほど、一般県民は、本土の

有識者たちとの距離を感じ、「ナイチャー（内地の人）はわかっていないねえ」などとつぶやきます。

一方、保守系タカ派の有名人たちの「活躍」も問題です。百田尚樹氏のような反中国派の文化人の中には、辺野古移設に反対する県民全体に、「反日」や「媚中派」のレッテルを貼り、口汚く罵ります。安倍政権が、このような右翼的な人物たちと近い関係を維持したことが、沖縄や本土のタカ派を勢いづかせました。

左右両極の有名人たちの、沖縄についての過激な応酬が続き、一般の県民は白けます。しかし皮肉なことに、対立が目立つことで、かえって沖縄を「ブランド」に押し上げ、おびただしい数の沖縄本が出版されてきました。内容はパターン化したものが多いのですが、確実に売れるので次々と出版されます。まさに「沖縄」は、出版社にとって打ち出の小槌なのです。

沖縄は複雑です。簡単に関与できるような地域ではありません。もし、沖縄に関わろうとするなら、まずは時間をかけて沖縄のさまざまな立場の人との信頼関係を築き、話を聞いてほしいものです。一方で、本土政治家の責任も指摘しなければなりません。とりわけ与党自民党の国会議員たちは、沖縄が経てきた歴史に疎く、失礼な発言も飛び出します。「頑張らないと沖縄の振興予算を獲得してやらんぞ」などと、上から目線の物言いも聞こえてきます。安倍・菅ラインの対沖縄強硬方針が、彼らの「強気」を支えたとも言えます。

沖縄県民は、歴史の荒波をかぶり、密度の濃い人間関係の中で、微妙な感覚を持つに至りました。一方で、戦争体験世代が政界から退場し、歴史に無頓着な世代が増えました。この傾向は、今後ますます強まるでしょうから、大きな課題でありましょう。

この講演で取り上げたものの、紙幅の制約から、この「講演会記録」では多くのテーマをカットしました。特に、本土からは見えにくい、沖縄の戦前史、教育の低迷と人材難、産業構造の歪みと荒れる社会、沖縄と台湾の関係などは非常に重要な問題ですので、別の機会があれば、述べたいと思います。

（２０２３年６月22日・公開講演会）

著者略歴（めぐろ　ひろし）

１９４７年生まれ。東京大学経済学部（都市問題）卒業後、横浜市役所、塾講師を経て、米国インディアナ大学に留学（大学院修士課程修了：応用言語学）。帰国後、通訳翻訳学校を経て、ＮＨＫ情報ネットワーク（現ＮＨＫグローバルメディアサービス）国際研修室に勤務。主にＮＨＫ職員向けオフレコ・セミナー「国際情勢」・「メディア論」両コースを担当。同社を退職後、名古屋外国語大学現代国際学部教授、法政大学沖縄文化研究所国内研究員などを歴任。

数奇な『入来文書』の運命
―朝河貫一の発見はなぜ埋没したのか？

横浜市立大学名誉教授　矢吹　晋（会員）

〝封建制〟概念追放論の虚妄

「❶日本中世史の分野では、封建制の概念の限界性が指摘されており、日本・ヨーロッパ・東アジアの歴史を比較することや、古代・中世・近世といった時代区分を考えることはすでに歴史学の現状からみれば困難である」「❷日本中世史の分野で、封建制は分析概念としての意味を失っている」「❸封建制が史料に出る言葉でもなく、また西欧中世史からの借用概念であるので日本中世史研究では廃棄すべきだ」――これは甚野尚志（早稲田大学文学学術院）が『封建制の多面鏡』（刀水書房、２０２３）の「訳者あとがき」で批判的に引用した〝封建制〟追放論者の主張である。嬰児を盥の水とともに流す、というが、過度に政治的な文脈で〝封建制〟の３文字を弄して、あげくの果ては３文字追放を主張するのは、まさに日本中世史界、病膏肓に入る、の構図だ。

私は２０２１年７月に『天皇制と日本史―朝河貫一から学ぶ』（福岡・集広舎刊）を上梓した。予想通り日本史学界から無視されたが、なぜ無視されるのか、その秘密を解くコメントを紹介しよう。一つは、アマゾン公式サイトのカスタマーレビュー、これは素晴らしい。〈好書家〉署名の筆者で、タイトルは「日本封建制論の正道」（２０２２年１月25日付）。以下レビューの一部である。

矢吹晋氏が何度も強調されるように、現在の歴史研究の常識から言えば、朝河の方法が正統であって、大塚〔久雄史学〕は邪道であろう。問題は戦後の永原慶二〔１９２２～２００４〕や石井進〔１９３１～２００１〕など、日本史の専門家たちの「混迷状況」だが、マルクス主義史学の影響だけでなく、やはり、大塚と同様に、戦前・戦時に実際に彼らが

経験した「不自由」の歴史的起源を過去に投影したいという心性は働いていたのではないだろうか。歴史とは過去の真実を解明する学問なのか、それとも今の人びとが将来を開拓するための道具を与える〔中略〕行為なのか、本当に悩ましいところがあるが、矢吹の紹介する朝河貫一の学問は正道の歴史学である。日本には、国内で無視されてきた日本人が海外で有名になると一躍もてはやすという悪弊があった〔中略〕、朝河は海外で有名になったのにもてはやされるどころか、無視され、黙殺され続けてきた希有な例外である。

この匿名筆者は、歴史学界の病を鋭く剔抉している。朝河貫一の学問は正道の歴史学である、と言い切り、歴史研究の常識から言えば、大塚久雄、永原慶二、石井進は邪道と断じている。ではなぜ、〝邪道歴史学派〟が日本では主流なのか。〈戦前・戦時に実際に彼らが経験した「不自由」の歴史的起源を過去に投影したいという心性が働いていた〉からだ。この〈心性〉が彼らを突き動かして歴史家たらしめた、というのは、その通りであり、同時に彼らの書籍が、その心性に共感する多くの日本の読者から歓迎された理由でもあろう。こうして朝河貫一の歴史学は学問の正道であるにもかかわらず、日本の戦前・戦時の体験のゆえに邪道歴史学に道を譲る結果になった。さて問題はその次だ。

〈朝河は海外で有名になったのにもてはやされるどころか、無視され黙殺され続けてきた希有な例外である。朝河を活かした日本史研究の可能性はありえた〔中略〕実際には発現しなかった〉〈不幸な偶然も作用したのかもしれないが、もう少し根深い（＝日本の歴史家たちも自覚できなかった深層心理上の）理由が作用していた〉とレビューは説く。

〈根深い、深層心理上の理由〉として〈好書家〉氏が何を想定したかはわからないが、私は福沢諭吉の脱亜論や、津田左右吉のシナ蔑視論（たとえば『シナ思想と日本』岩波新書、１９３７年）を想起する。明治維新を経て日本は欧米先進国に次いでアジア唯一の帝国主義国家として自立した。その誇りと反面、すなわち内心の居心地の悪さは際立つ。それまで和魂漢才として学んできた先輩国を侵略する立場に陥った。ところが21世紀に至り、日本の近隣諸国が経済的にも国際政治的にも勃興し、脱亜論はどんでん返しだ。Ｇ７という旧帝国主義国の一員として価値観を共有している、などとメディアや政治家が繰り返すたびに、いまや経済的・国際政治的に劣位と化した日本のコンプレックスはいや増す。

もう一つ、読者の声を紹介したい。これは大学入学以来の旧友の私信だ。彼は全15巻の著作集をもつ高名なヘーゲル学者である。

矢吹晋様、ご高著『天皇制と日本史』（集広舎）を拝受。近所に住んでいた立花隆（１９４０～２０２１）が亡くなって、坂野潤治（１９３７～２０２０）もしばらく前に亡くなり、西部邁（１９３９～２０１８）の自殺がもっと前にあった。寂しい思

いの中にご著書が登場し、旧友大著を為し、学の命盛んなるを証す、我もまたその命の波に遊ぶを喜ぶ心境。冒頭に〈朝河貫一語録〉があり、朝河学の全貌が分かりかけた。日本の封建社会を実際の目で見、西洋史学の定型との違いを指摘することは容易でない。時代的にもっと後には、外国文献に触れる機会は多くなったが、日本の実情認識は薄れたという意味で、稀有の歴史的な条件を生かした学問だと思う。堀米庸三（１９１３～１９７５）とか、丸山真男（１９１４～１９９６）とかの封建社会の認識はすべて間接情報による。荻生徂徠（１６６６～１７２８）を丸山が読むとき、ヘーゲルの歴史哲学の教養が働いていたが、徂徠もヘーゲルもどちらも「借り物」の知識だった。東西社会の両方にまたがって本物の理解力を発揮することは、普通の学問環境では達成できなかった。天皇制について、君主制から民主制へという近代政治の定型では解釈できない面を指摘する姿勢が、ユニークな把握力を示す。日本では〈権力の二重化〉を人為的に作りだし、二重化によってこそ、社会の歴史的適応・進歩が可能になった……と私は解釈する。日本の学界は小便被った蛙のように変らないだろう。学会組織、アカデミズムは間違った定説を防衛し保存する機能しか持たないから。若者の研究者は定説を持ち上げるふりをして学会の門を入り、定説保存員会のような人間関係を作ってそのなかで定年を迎える。大兄の奮闘は見事ですが、ともかく時間をかければ必ず爆発する定説破壊装置を作って自分の死後の世界に残すよりほかに打つ手はない。そういう危険物を贈っていただいたことに感謝したい。

ヘーゲル学者として高名なこの旧友は、１９５８年に知り合ったときも飛び切り頭脳明晰と感じたが、64年後の今日も毒舌は衰えない。〈必ず爆発する定説破壊装置〉という警句には、思わず破顔一笑だ。朝河史学は生誕１５０年、没後75年を経ても、ほとんど読まれていない。無視と黙殺の世界で、辛うじて朝河史学に触れた本『朝河貫一と日欧中世史研究』（吉川弘文館、２０１７年）が登場した。所収の海老澤衷論文および近藤成一論文を読んでみよう。

Ⅰ．海老澤衷論文「鎌倉幕府の成立と惟宗忠久―朝河貫一研究との関連で」

海老澤氏曰く「矢吹晋氏は忠久論を〝陰画〟としてとらえているが、中世国家成立史全体の研究からすれば、ポジとネガは逆転し、渋谷（入来院）氏の活躍は〝陰画〟であり、惟宗（島津）忠久の動向こそが〝陽画〟である」。海老澤氏のような理解が日本史学界の常識だ。その根拠は「鎌倉幕府成立史を究め、いまでもそのスタンダードの位置を失わない石井進著『日本中世国家史の研究』（岩波書店、１９７０年）などで、惟宗忠久の動きが随所で考察され、守護および地頭研究の一原点となっている。その後の研究においても、東国では特に「守護・地頭」に関わる

歴史事例が乏しく、鎌倉幕府成立期に生きた島津忠久は全国的に見てもこれらを研究する貴重なモデルとなっている」からだ。

海老澤論文を要約すると、次の4か条になる。❶惟宗忠久は「文治・建久期の「地頭・守護・図田帳」について、自己の持ち場で懸命にそのあり方を追求し〔中略〕幕府中枢部に受け入れられ」た。❷朝河は「島津忠久の出自に世界的に見ても希有な伝承体系を見出し、客観的に分析すること」を目指した。したがって、西南雄藩に対する個人的感情や「真偽を明らかにする」といった初期的実証主義は克服されていた。❸朝河の「関心事は、伝承がどのような事実の上に構築され、長い時代の中でどのように有効性を保ち、取捨選択されていくか」である。執筆過程でマルク・ブロックの『王の奇蹟』が意識されていたことは十分に考えられる。❹朝河は「日本の「文明開化」や「近代化」の裏に潜む特異な系譜意識に関心を持った〔中略〕その論旨構築の方法自体が〔1930年代の日本史学界では〕異質なものであった」。

歴史学の門外漢として朝河を読んできた矢吹の印象は、海老澤と相当に異なる。

❶朝河はこの忠久論（「島津忠久の生い立ち」矢吹編訳『朝河貫一比較封建制論集』所収）を「書きたくて書いた」のではない。朝河からすると、このような小品は、もし書かないで済むならば書きたくなかったエッセイだが、日米開戦必至を予感して、日本ナショナリズム弾劾のためこれを書いた。私が『入来文書』を歴史の本流を描いた〝陽画〟と呼び、「忠久の生い立ち」は〝陽画〟を補完する〝陰画〟にすぎぬと呼ぶ所以だ。同時に〝陽画〟（『入来文書』）、〝陰画〟（『島津文書』）に見立てる。島津文書の史料的価値は『入来文書』に及ばない、この史料評価が〝朝河史学の核心〟だ。質的にも量的にも『入来文書』は『島津文書』の付録にすぎない、と見る常識に挑戦した労作が『The Documents of Iriki』なのだ。

松下重資『島津創業史』の忠久論は、朝河から見て二重、三重に誤謬の拡大再生産だ。そもそも朝河は島津久光が重野安繹に命じて調べさせ、根拠を発見できないにもかかわらず、訂正を怠る『島津国誌』への不満を抱いていた。あまつさえ〝以仁王伝説〟を加えて、対皇室関係を偽造する工作が日本の排外ナショナリズムに何をもたらすか、朝河の危惧は深まる。盟友・三上参次が巻き込まれた正閏（せいじゅん）問題に同情してきた朝河は、島津藩史の〝偽史作り〟が皇国史観に流れる日本社会の風潮を加速すると危惧した。海老澤は「世界的に見ても希有な伝承体系」と評し、朝河の風刺を誤読しているように見える。〝忠久を頼朝の落胤とする説〟の流布を必要としたのは、忠久が元来〝帰化系〟で近衛家警護を担ってきた家柄であり、頼朝の「敵対勢力側にいた人物」だからではないか。とはいえ、忠久はその経歴と個人的能力のゆえに国際情勢の分析や権力の所在には敏感だ。東国の鎌倉に幕府が樹立され、この権力が京都の公家勢力を呑み込むのも時間の問題と見極めた忠久は、頼朝の権力と和解する道を模索した。現実の幕府対公

家勢力との権力闘争の帰趨は、後鳥羽上皇の決起が失敗し、１２２１年、隠岐島に流されたことで決着した。〝院政下の庄〟に光を当てた朝河の庄研究は、牛原庄に始まり水無瀬庄をもって終わる。後鳥羽上皇の配流と水無瀬庄の終焉＝庄の封土化完成は、経済的現実が政治的帰結を導いた史実を象徴する。

幕府創設の１１８５年から１２２１年隠岐島配流までわずか36年にすぎないが、この間の権力交代期にあって、忠久側は頼朝との接点を必死に求めた。その苦闘の結実が〈頼朝落胤説〉にほかならない。他方、入来院側は相模国から薩摩に下向した時点からすでに幕府の御家人であることは天下周知の事実だ。朝河は忠久の横顔を次のように結論づけている。

忠久は自他の称した通り惟宗氏で、その名に忠の字があるのもそのためであろう。父母については徴すべき確証がない。生まれたのは１１６５年よりやや前だ。多分もとは純粋の京紳で、若いときから藤原氏ことに近衛家の所従であり、その恩顧によって兵衛、衛門の尉となり、検非違使となり、一時は賀茂神社の祭主を務めた。近衛を仰ぐことから島津庄に重要な庄職を宛て行われた。少なくも１１８０年まで在京し、然る後、頼朝の御家人となった（矢吹訳『朝河貫一比較封建制論集』４３７頁）。

忠久は、鎌倉から見ると、二つの意味で重要な役割を果たしうる人材だ。一つは、摂関政治を担う近衛家を通じて公家勢力の動向をつかむ役割。もう一つは、近衛家の財政を支える島津庄の管理人として、九州全体における幕府権力と旧公家権力との決戦において重要な役割を果たす可能性。こうして鎌倉側の取り込み思惑は、忠久の旧政権崩壊意識と重なる。鎌倉東国政権が全国政権に成長するためには、忠久の協力は必須で、忠久はこの期待に応えた。海老澤のいう「前半生における謎」が消えて次第に『吾妻鏡』で存在を大きくするのは、以上のような経緯ではないか。一言でいえば、忠久落胤伝説は必要性があって創作され、それは明治維新まで続いた。しかしながら、忠久＝島津藩は、古代日本の中世日本転換史においては、脇役にすぎない。主役の座は頼朝と頼朝を直接支えた御家人たち、たとえば地頭としての入来院なのだ。私が『入来文書』を〝陽画〟に、島津忠久の活動を〝陰画〟と見立てる所以だ。神奈川県大和市の高座「渋谷」は、中世の「渋谷庄」の名残りだ。その渋谷一族のうち、相模渋谷氏は１２４７年に薩摩国入来院に地頭として派遣された。渋谷氏の上野、伊勢、美作などの領地はその後他人の手に渡ったが、薩摩には、その倍以上の領地が戦国合戦の恩賞（恩給 benefice）として与えられた。一時は島津を恐れさせる勢力を誇示したが、やがて島津の軍門に降り、明治維新を迎えた。この武家屋敷に残された『入来文書』を解読して、朝河は武士社会の誕生から明治維新による終焉までの細密画を描ききった。

結論を急ぐ。❶日本の庄をヨーロッパのマナー（manor）になぞらえるのは、時代錯誤である。庄は古代的なものだが、その土地が封土化して、日本の封建時代が生まれた。封土化した

新型庄こそがマナーと対比できるのであり、庄一般をマナーに比定するのは、古代と中世を混同した時代錯誤だ。❷ヨーロッパのマナーには農奴がいたが、日本にはいなかった。日本の小作人あるいは下人、所従などと呼ばれた農民は、土地を所有する領主あるいは地主から土地を借りて耕作し、地代として年貢を収めた。ここには経済外的強制はなく、小作人たちは自らの意志で巧みに水田を耕した。この自主性、主体性はヨーロッパの農民と大きく異なる。❸ヨーロッパの三圃制農業と、日本の水稲耕作には大きな違いがある。水稲耕作は水が肥料をもたらし、土壌を保護するので、連作が可能であった。千年以上にわたって連作しても、連作障害は生じなかった。これに対してヨーロッパの乾地畑作農業（dry farming）は連作に限界がある。地力を養うために、しばしば休閑地を必要とした。食用の冬麦と飼料用の春麦の輪作からなる制度が完成したあとでも、地力回復のために休耕・放牧による畜糞の供給が不可欠であった。ヨーロッパの農業にとって「土地の割替え」はたいへん大きな事業であり、領主がその役割を担い、農民に耕地割当てを強制した。農民の大部分はまた領主農場において、領主の直接指揮のもとで農耕に従事し、いささかの自主権ももたない農奴であった。これに対して日本の農民は小作地を借り受けて、自らの経営判断で、あたかも自作農のごとく働いた。日本では領主の直営地で働く農民の比率は限られており、人格的に従属する関係にはなかった。要するに、三圃制の耕地割替えと直営農場での労働を主体とするヨーロッパの農民が農奴的身分に陥るほかないのに対して、定められた小作料を支払ったあとは、余分の収穫を自らのものとできる日本の農民は、マナーの農奴と比べてはるかに自由を謳歌していた。この実像を唯物史観学派は把握できなかった。❹武士階級の内部を見ると、ヨーロッパの封建契約では領主と臣下が対等であったが、日本では大名と御家人の関係で、後者の立場が弱い。代表的なフランスの場合、戦国時代が長く続き、領主と家臣の関係はときには家臣の立場が強い局面さえ少なくなかった。つまり長引く戦争では、強い家臣をどれだけ臣下に集めることができるかが勝敗を決した。そこで強い騎士は、強い立場で領主と交渉して、その立場を強めた。❺では日本はどうか。朝河は日本では御家人の立場が弱く、領主（大名）の立場が強いことについて二つの理由を挙げる。戦国時代が短かったために、武力に優れた家臣がその立場を強める間もなく、信長・秀吉による天下統一が進んだ。加えて日本では、大化改新以来、中国の集権的政府（大一統）のイデオロギーを受け入れてきたので、大名と御家人が平等であるとする観念が育ちにくかった。❻総じて朝河の日本封建制論の際立った特徴は、水稲耕作のもつ意味を徹底的に考え抜いたこと、そこに着目して農民の地位が同時代のヨーロッパよりもはるかに高かったことを指摘したことだ。ずばり言えば、日本の小作農は農奴であるどころか、まさにその水田の経営者であった。この文脈で、日本の農民の社会的地位はヨーロッパ

の農民と比べてはるかに高かった。しかしながら、日本史家はヨーロッパ事情に疎いために、農奴的なヨーロッパの農民よりも、日本の農民はもっと奴隷的だとする間違ったイメージを抱き続けた。封建的という形容句はこの文脈で用いられ、日本の中世史研究は、封建制（feudalism）理解を、二重、三重に間違えた。この混乱を克服すべき21世紀初頭の現在、もう一つの過ちが繰り返されようとしている。それは〝封建制〟の３文字を日本史から追放する「新たな逆流」である。封土（fief）という共通のモノサシを失うことによって日欧の歴史対話はますます混迷に陥るであろう。

Ⅱ．帝大国史科の限界か――近藤成一論文を読む

近藤成一「朝河貫一と日本の歴史学界」を読んで深い失望を禁じえない。朝河と黒板勝美との論争を紹介し、その論点を整理した「封建制の起源と庄の起源」の紹介は的確であり、さすがに専門家の分析だ。また朝河が強調した職（shiki）の紹介も要点を外さない。だが、これで終わり、とは腑に落ちない。初期の論文で、黒板の理解をはるかに超える斬新な封土論を提起した朝河は、その後、『The Documents of Iriki』で論点を整理し、さらにその後も「封建制の性質」について思索を続けたのであるから、朝河の封建制論はその後、どう発展したのか、それを追求することは、この時代を専攻する歴史家の当然の課題ではなかろうか。朝河の「封建制の起源と庄の起源」が書かれたのは１９１４～15年であり、いわば初期朝河の成果である。マナーと庄の異同についてようやく朝河なりの一つの結論を得た時期の作品だ。その後、朝河は日欧封建制の比較研究に没頭し、１９２９年に『The Documents of Iriki』を公刊し、１９３１年にセリグマン編『社会科学百科事典』に「日本封建制」を執筆した。朝河の比較封建制研究を見てくると、朝河史学は、『The Documents of Iriki』を経て、飛躍的に内容が充実したことは誰の目にも明らかだ。近藤が飛躍的に豊かになった朝河史学に取り組まないのはなぜか、解せない。日本史の同じ時期を研究対象とする近藤論文が初期朝河で終わるのはどういうことか、まるで理解できない。近藤がこれまで執筆してきた何冊かの書籍は朝河史学とどのように関わるのか、もし見解が異なるとしたら、どの点でどのように異なるのか。それを明らかにしてほしい。朝河と同じ時代を扱う定年教授の分析に期待した私としては肩すかしを食わされた気分である。初期朝河はその問題提起に際して、慎重のうえにも慎重な言葉を選ぶので、専門家にもわかりにくいことは黒板勝美の誤解が端的に証明する。しかしながら、朝河の思考もその後成熟し、『The Documents of Iriki』を経て日欧比較史の分析は、一方でより深く、他方でより簡明な説明に発展してきた。私が網野善彦史学批判に際して要約した内容は過度の単純化という大方の批判を予想しているが、専門家ならば、門外漢の私よりも的確な解説が可能だと信ずるので、あ

えて苦言を呈しておく。放送大学のテキスト、近藤著『日本の古代中世』をめくると、『島津家文書』の付録程度にしか『入来文書』を扱っていないように見受けられる。これは朝河史学に対する根本的誤解を意味する。一例を挙げよう。近藤は鎌倉期の庄について、領家方と地頭方の「相論」（紛争）を解説し、それを解決するために「下地中分」が行われたと薩摩日置北郷の図を解説した。そのあと、渋谷家初代定心から10代重豊までの土地の相続を解説し、分割相続が物理的限界に達して長子相続制（惣領制）が成立したと説いた。これでは鎌倉幕府成立の意味を説けないのではないか。論理が倒錯している。相模国渋谷庄を本拠地とした渋谷重国の孫・定心は、１２４７年の宝治合戦を闘い、恩賞（恩給）として薩摩（のちに入来院と呼ばれる）の所領を与えられ、地頭として赴任した。この経歴から明らかなように、渋谷一族は恩給として封土（fief）を与えられ、赴任した。これとは対照的な生い立ちが島津一族である。島津忠久が頼朝によって島津庄地頭に任命されたのは、通説では１１８５年とされており、渋谷氏下向の62年前になる計算だが、時期については疑問も多い。朝河は忠久の地頭就任は１１９７年（32歳）、守護就任は１２０３年（38歳）と見ている。島津庄は、由来摂関近衛家を領家とする庄であり、京都の朝廷勢力と縁が深い。近衛という強い領家によって任命され、領家のために「下司として働いていた忠久」を頼朝はそのまま地頭に任じた。忠久が庄の下司から頼朝の地頭に変身したといっても、どこまで鎌倉殿に忠誠を誓うかは保証の限りではあるまい。これが南九州における鎌倉幕府初期の影響力の限界であった。だからこそ幕府側は信頼できる御家人渋谷氏を「もう一人の地頭」として、島津庄のすぐ近くに派遣し、島津側を困惑させた。鎌倉幕府の影響力は当初は東国に限られていたが、その後、九州や畿内を含めて全国的政権として強化されていった。地頭が設置された当初は、領家が地頭戦の停止を要求したり、地頭による下地支配を「濫妨」とみなして領家側が訴えるケースもしばしば見られたが、「泣く子と地頭には勝てぬ」と言われるほどに、武力を背景として地頭の地位が強化されてくると、領家側は地頭の「非法」を訴える作戦に転じ、幕府の法廷も双方の主張を聞いて裁定するようになった。幕府などが与える恩給に対して、有力寺社などへの寄進という方法で、一定の年貢を支払い、保護を求める動きも活発化し、「下地」（土地そのもの）とその「上分」（稲絹などの収穫物）をめぐる紛争はますます複雑化した。そこで成立したのが「下地中分」という和解案だ。水田や畑を分けて領家分・地頭分として、分割された田畑から収穫される稲絹などを領家分・地頭分の年貢とするやり方だ。その下地の上分は、すべてわがものとするという意味で「一円」と呼ばれた。これは領家方と地頭方の紛争の解決策であるから、解決策の前に、地頭の台頭とその契機を作った、恩給地＝封土＝入来院下向の説明をすべきではないのか。庄内に生まれた私的武士の勢力が領家の影響力と拮抗するところまで成

長した結果、「下地中分」のような解決策が生まれたのだ。

近藤は「下地中分」を説いたあとで、『入来文書』の初代から10代に至る「譲状」を調べて分割相続が家督相続に至る経過を解説している。総領による家督相続に収斂した理由として、田畑が再分割できないほどに細分された事実を挙げている。なるほどこれは重要な条件だが、このほかに、戦争において兄弟が敵味方にわかれて戦う局面が現れたことへの反省や、また一族郎党を率いて武具を調達し大部隊を作り、戦闘を有利に進めて戦功を挙げ、恩給を得るといった封建制特有の事情も大きな要素として挙げるべきではないか。要するに近藤の分析からは、『入来文書』が生まれながらに封土（fief）として時代の推進力を果たしたこと、ここに『島津家文書』の欠落を補う『入来文書』の意味があり、朝河が着目したのは、まさにこの一点である史実が見えない。島津一族は、当初摂関近衛家を領主とする庄であったが、隣接する入来院という封土（fief）との対抗関係のもとで、庄が中世の封土に転化していく過程が読み取れない。

最後に〈帝大アカデミズムの限界〉について蛇足を付す。近藤氏は東京大学史料編纂所教授を定年まで勤めた。東京帝国大学に国史学科を創設したのは、朝河が指摘するように薩摩藩出身の重野安繹であり、その非実証的作風は朝河が婉曲に批判した通りだ。もう一つ。東京帝国大学に東洋史を創設したのは、白鳥庫吉である。彼は１９１０年、日韓併合の年に、邪馬台国＝九州説を唱えた。併合の主体日本の帝国の御先祖が〝鯨面文身〟のタトゥーでは具合が悪いと考えて、畿内から九州に追放した。江戸時代までは邪馬台国をヤマトと読むのが常識であった。白鳥庫吉は日韓併合のイデオロギー攻勢のために奇怪な学説を提起した。この帝国主義史学もいまだ克服されていない（矢吹『天皇制と日本史』補章参照）。

【補足『十六夜日記』】御成敗式目という封建法は、律令の孫に当たると朝河は説いた。律令から庄園法が生まれ、庄園法から御成敗式目が生まれた。藤原定家の子為家の側室・阿仏尼は為家の正妻の子為氏と播磨国細川庄から得る年貢相続権をめぐる激しい争いに巻き込まれた。為家は当初為氏に相続させたが、その後側室の子為相が和歌に秀でていることを知り、「悔返」（悔い返し）権を行使する遺言を残した。側室・阿仏尼は京都の六波羅探題に訴えたが、認められず、57歳の阿仏尼は幕府に直訴すべく、鎌倉に旅した。彼女は１２７９年10月16日（旧暦）京都を旅立ち、幕府に訴え、死後１３１３年にようやく為相への相続が認められ、冷泉家が生まれた。為相への遺言は１２７３年だが、40年後にようやく「悔返」を認められたわけだ。この一事は、武家法がいまや庄園法に代わって、公家界にも適用される段階に至ったことを示す。『十六夜日記』は優れた紀行文として有名だが、武家法が庄園法に代替した転換を活写している。

※本稿は２０２２年11月20日および２０２３年11月19日の２回にわたる入来花水木会講演の一部である。

陶々俳壇（ようよう）

陶陶句会結果
2023年4月

兼題「愛」　　**馬場由紀子**

花名所千鳥ヶ淵は人の波　伊藤正堂

◎紅杓　奈良時代に唐から伝わり十世紀余を経ても愛でられる桜は国花にふさわしいと実感させられる。

○明良

花筵敷いて夜宴の陣を取る　〃

○紅杓

○善一　夜の花見の準備のため会社などで、新人が早く行って花筵を敷いて陣取りをする。よく見かける風景である。

山吹の咲く厨口光満つ　日野正子

◎二三四　古い民家の御勝手を思い浮かべました。台所仕事の手を休め、ふと見ると鮮やかな黄色の花がこちらを窺うように咲いている。昔の家の御勝手は建物の北にあるものでしたが、山吹のおかげで光が差しているように明るい。満ちているのは光だけでなく、春が運んできた希望でもあります。

烏野豌豆天下取らんと萌えいづる　〃

○二三四　烏野豌豆の画像を確認し、田舎の野原や畦道でよく見かけた植物だったと知りました。控えめな花をつける野の草も「天下」を取る気。種が熟したあと莢が盛大にはじけるのはその心意気ゆえかもしれません。

●由紀子

ボタ山の淡き稜線菜種梅雨　松島二三四

◎田紀子　北九州の炭鉱跡に春の雨が降り続く。あの炭鉱では山本作兵衛の画にあるような営みがあったのだろうと、思いを馳せる。降り続く春の小雨にけぶる視界の奥にボタ山が淡く透けて見える。

○正子

パイン割るフォルモサの陽の香り立つ　〃

○田紀子　台湾パイナップルは芯まで甘くて美味しい。それは台湾の太陽の賜物だったのか。新しい切り口に惹かれます……作句の切り口です。

卓袱台の金太郎飴ホワイトデー　〃

○田紀子　ホワイトデーのお返しが金太郎飴とは、贈り主はシャレの効いた方だが、明らかに義理チョコへの義理のお返しだろう。卓袱台に所在なげに置かれている金太郎の顔を想像してしまう。

声高に声を残して鶴帰る　大内善一

○紅杓

○明良

○正堂

○田紀子　その声は鶴の別れの挨拶なのか。また会えるのかどうかは分からない、だから力強く別れの言葉を放ち去って行く。一期一会の形の一つと捉えてみるのも面白い。

惜春や愛憎半ばする心地　〃

○明良

○田紀子　春は何事も改まる時。何とか腹に収めて明るい夏へと。

巣立鳥発つや浅間はまた噴けり　〃

○正堂

○田紀子　荒々しい火山の麓では、人々や動物たちが命をつないでいる。剛柔の明確な対比により命の儚さと愛おしさがより強調されたと思う。

覚えなき女性（ひと）の挨拶花曇り　橋本紅杓

○正子　「花曇り」が情景をほんわりと包んでいます。

○二三四　きれいな女性から、すれちがいざまに会釈でもされたのでしょうか。「花曇り」が微妙な心理と重なります。自分もこのようなことがあります。最近は誰にでも挨拶しておくようにしています。花曇りの昼下がり、美しい女性に挨拶され、はて誰だったのかと考えることだった。曇り空のどんより感とすっきりしない気持ちがよく付いている。

●由紀子

永き日の武蔵野の果ての富士見えて　〃

○善一　春分を過ぎると夜よりも昼の時間が長くなり、のどかな日がつづき武蔵野の果てに残雪の富士山が峨々とそびえ立っている雄大な景色が見える。

○田紀子　句の雄大さに惹かれる。「永き日や武蔵（むさし）国の果ての富士見えて」だったら完璧。

孫愛し桜の下のランドセル　瀬﨑明良

○紅杓　子どものランドセル姿を思い出します。

遅咲きの梅を圧する桜かな　〃

○正堂

霊域となりたる桜追悼碑　馬場由紀子

◎善一　死者を偲んで建てられた追悼碑の碑文は読み難いが、今は霊域となって桜が植えられらんまんと咲いている。

○正子　復興の進まない大震災跡地に桜は毎年花を咲かせる。

○明良

古本の革の装丁愛で日永　〃

◎正子　本棚の整理を思い立ち、手に馴染んだ革の装丁の愛蔵本を手に取ると、いろいろなことが思い出され、時が経つのを忘れる。

○二三四　春の一日、心穏やかに本棚の整理をしている景を想いました。日の短い冬のように日暮れに急かされることもなく、お気に入りの一冊の革の装丁を細部まで愛でる。至福のときです。

○正堂

成長する自宅出張サービス

消費者のニーズが多様化するに従い、出張シェフや出張収納整理人、ハウスキーパーや出張マッサージ、訪問介護など、専門職が自宅などを訪問してサービスを提供する新しい「上門経済」が次々と生まれている。

消費者にとっても嬉しいサービスであり、市場に活力を注ぐものである反面、見過ごせない問題もある。労働契約をめぐるトラブルや人身財産の安全確保の問題だ。例えば、健康であるという証明をもたないシェフは利用者の健康への脅威になる。出張サービスを手配するインターネットサービスにはサービス基準や管理監督制度がいい加減なところもある。

「上門経済」は便利屋や少額のお助けサービスとは違い、そこで働く人間に経済主体として光を当てる必要がある。この分野が今後も成長していくためには、早急に手配アプリなどの関連企業を管理監督する制度を整備し、一定の基準を確立する必要がある。また、手配アプリと手配される労働者の健全な契約制度を促し、違反行為を明確化し、ブラックリストの運用や懲戒制度も設けるべきである。

（『中国青年報』２０２３年７月５日）

ＡＩ詐欺が政界を脅かす

映像の顔を別人の顔に換えたり、声を別人の声に換えたりというＡＩ技術を使った詐欺が頻発している。一部の犯罪者は政府指導者や幹部をかたって詐欺を行っており、厳重な警戒が必要だ。

政府の指導者や幹部は仕事柄、映像に登場する頻度が高い。顔や声の情報をテレビやラジオから十分な量に抜き出すことが可能だ。国網信息通信産業集団（ＳＧＩＴ）の安全科学研究の専門家趙明明氏によれば「10文字から32文字の音声データがあれば合成できる」ということだ。

司法による取締りを徹底するとともに、社会においても騙されないという意識が必要だ。

（『瞭望』２０２３年第７期　７月12日）

一人っ子の介護問題

育ててもらったことと、老いをみとることのバランスはどう保つのか。一人っ子世代のみならず社会につきつけられた難題だ。浙江省海寧市長安鎮では、60歳以上で鎮に本籍がある人で、一人っ子の親または人口計画奨励策に適合する人々、子どものいない独居老人世帯に限り、入院１日１００元の入院付添い手当を１回あたり上限９千元として支給するという政策を打ち出し、論議を呼んでいる

長安鎮社会事務所の盛月新主任は、５年前に「独生子」という写真をネットで見て、心が動き、この問題を鎮全体のことと捉え、解決策を模索してきたという。二つの病床に横たわる両親の間に一人の男性がうずくまる写真だった。

以来温めてきた計画は今年のはじめに鎮の人民代表大会で採択され、新政策が動き出した。総額１１５万元が全額鎮の予算から拠出され、運営は入札により中国人寿が担うことになった。

長安鎮仰山社区の居さんはその恩恵を受ける一人だ。居

さんの72歳の父親は心臓病で47日間入院した。申請書は提出済みで、審査が通れば半月後には4千7百元が受け取れる。お金より政府が一人っ子家庭を気に掛けてくれたことが嬉しいと居さん。地元当局の調べでは1万2千人が補助金対象になるだろうという。

近年、一人っ子、特に夫婦とも一人っ子家庭で育ち、二人で4人の老親をみなければならない場合、一人っ子たちは親の介護と仕事、海外生活、肉親の情や責任、将来への夢の狭間で悩み、出口が見つからない状態が続いている。補助金政策は確かに彼らの負担を軽減することにはつながるが、根本的な解決策にはならないだろう。社会保障政策は全体的にデザインされたシステムでなければならず、制度上の重複などを避け、本当に助けが必要な人に助けが届く制度設計が必要だと、浙江工業大学祝建華教授は指摘する。

（『銭江晩報』2023年7月17日）

中国成薬原料が投機対象に

7月は本来中国成薬原料の取引が少ない時期だが、今年は違う。価格は年初から高止まりで、常用原料300数品目のうち、200以上が値上がりしている。例えば、当帰は1キロあたり60元から200元に、党参は80元から220元に、沙苑子は10倍になった。40年のベテラン中国医も今までにない値上げ幅だと嘆く。

値上がりの主な原因は流動資金が中国薬材市場に流れ込んだことだと業界関係者はいう。このまま規制されなければ、業界の利益が損なわれ、将来の発展は阻害されるという危機感もある。末端価格の高騰を受け、産地では栽培規模や面積の拡大が続いており、供給過多になる恐れがある。また、ただでさえ「中国医学不要論」の影響で消費者の中国医学離れが見られる中、製品価格高騰により、それがさらに加速することも考えられる。何よりこれは、社会の権威や機能に対する脅威であり、悪貨は良貨を駆逐する現象であることが問題だ。

中国中薬協会は6月22日国家中国医薬管理局に状況を報告し、早急に対策を打つよう要請した。投資家やディーラーが結託して中国成薬原料を投機の対象とする動きを止めなければ、正常化は望めない。

（『光明ネット』2023年7月17日）

慈善を商売にするなかれ

治療費支援のクラウドファンディングはインターネットの特性を生かし、多くの家庭を救い、患者に希望を与え、医療保険を補完する役割を果たしている。しかし一部報道により、集まったお金の一部から職員に手数料が払われていることがわかり、社会からの信用が揺らいでいる。

現在、クラウドファンディングに関する法整備は始まったばかりだ。昨年末に公布された慈善法の修正法案に関連の項目が盛り込まれ、今後実際の運用の中で、さらに細かい規定が増え、充実していくことが期待される。

これまで問題となっているのは、公益性と商業性のバランスだ。サイトはそこをはっきりさせるべきで、特に手数料などが発生するならば、規準やルールを定めるとともにその情報を公開して透明性を保つべきだ。

もちろん商業的な要素も排除できない。商業道徳や社会道徳、法律が許す範囲内で、ある程度の利益があってこそ長期的発展が望まれ、多くの患者が救われるというのも事実である。

（『経済日報』2023年7月16日）

協会通信

◆理事会報告

8月度は理事会を休会とし、7月度の理事会議事録は9月の理事会で承認されたあと、『善隣』11月号に掲載される予定である。

◆「長寿祝賀会」開催

コロナ感染も落ち着いてきたこともあり、9月14日に「長寿祝賀会」が4年ぶりに開催された。2020年～2023年の白寿、米寿、喜寿の祝賀対象者は47名おり、うち25名が参加し、会員を含め総勢37名で宴を催し、歓談の輪が広がった。

◆全国戦没者追悼式に出席

8月15日に日本武道館で「全国戦没者追悼式」が挙行され、内閣総理大臣名で当協会にも参列要請があり、藤沼弘一会長が代表として参列した。

（事務局長　竹前栄男）

会員だより

◎訃報

武内優氏（89歳）
令和5年6月6日逝去
謹んで哀悼の意を表します

▼会員寄贈図書

・大類善啓様より『ある華僑の戦後日中関係史―日中交流のはざまに生きた韓慶愈』（大類善啓著、明石書店）

同好会だより

〈俳句会〉

対面とオンラインでの俳句会を開催しています。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。

みんなの写真館

五所川原立佞武多祭（表紙）

三大ねぶた祭は、青森ねぶた祭り、五所川原立佞武多祭、弘前ねぷた祭りです。その中で、一番迫力のあるのは、五所川原立佞武多祭です。立佞武多は、明治中期から大正初期にかけて行われた五所川原市の伝統民俗で「立佞武多」の名称は平成の復活の際に名付けられたものです。高さ20メートル以上、重さ16トンという巨大なもので、弘前市の扇ねぷたとも、青森市の人形ねぶたとも違う、明治末期の巨大化した佞武多の様式を伝えています。運行形態は、大太鼓（忠孝太鼓）を先頭に、台車に乗せた立佞武多を数十人の引き手が台車の左右に付けたロープにとりつき2列になって引きます。2列の間には、太鼓、笛、手平鉦で構成される数人の囃子方が囃子を奏し先頭となり、次いで数十人のハネトが「ヤッテマレ」などのかけ声をかけてはねながら続きます。この写真は今年8月初めの東北旅行で三大祭りめぐりの際に撮影したものです。

（姜晋如）

終戦78年　全国戦没者追悼式に出席（表4上下）

終戦から78年となった8月15日、「全国戦没者追悼式」が、千代田区の日本武道館で挙行され、会長が代表として参列した。今回は4年ぶりで、出席人数も制限されたが、台風7号の影響でさらに遺族600人以上が出席できず、外の酷暑とは対照的に落ち着いた雰囲気の追悼式であった。天皇皇后両陛下がご臨席の後、国歌はコロナ対策のため歌わないで楽団の演奏を聴き、内閣総理大臣が式辞を述べたあと、天皇皇后両陛下が所定の位置にお立ちになり、正午の時報とともに一同黙とうを行った。次に天皇陛下がおことばを述べられた。その後、衆議院議長、参議院議長、最高裁判所長官、遺族代表が追悼の辞を述べた。ここまでで天皇皇后両陛下はご退席になられた。この後も延々と献花が続くという流れであった。今年に限っては、黙とうの最中に、引揚の年（昭和22年）7月に母親が亡くなったことが思い出され、急に胸が熱くなるのを覚えた。

（藤沼弘一）

2023年10月の行事予定

5日（木）　14：00　公開 第15回対面＆オンライン講演会
「近時の金融政策と日本経済の課題」
原真人氏（朝日新聞経済担当編集委員）

10日（火）　14：00　謡曲会（松木千俊先生お稽古）

11日（水）　13：00　対面＆オンライン俳句会
兼題「染まる」及び当季雑詠から5句を投句（9月末までに）

12日（木）　14：00　公開 第16回対面＆オンライン講演会
「21世紀初頭・中国大陸における景観文化躍進の記録」
小林治人氏（株式会社東京ランドスケープ研究所会長）

20日（金）　14：00　公開【善隣中国塾】（対面のみ）
「緊張する日中関係」
塾長講演：矢吹晋氏（横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問）

26日（木）　14：00　公開 第17回対面＆オンライン講演会
「インド政治・経済・社会の動向と日本」（仮題）
久保木一政氏（元三菱商事、ジェトロのインド事務所駐在および連携、現在㈲インド総合研究所社長）

10 月 の 会 議 予 定

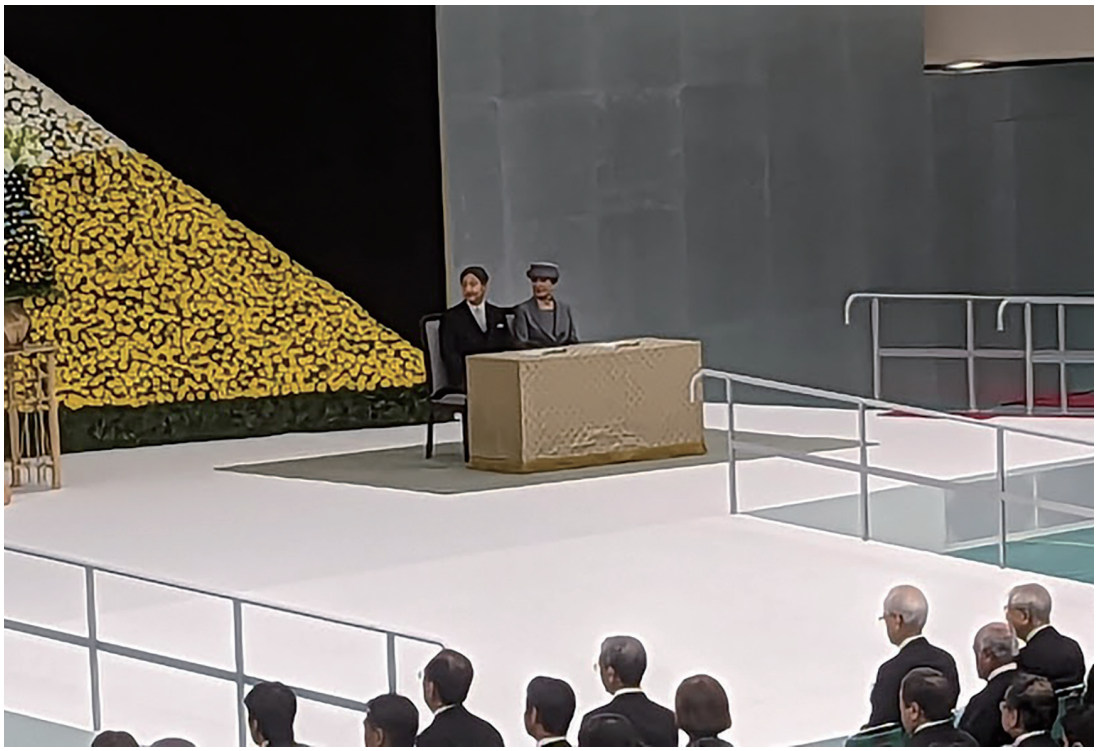
3日（火）	13：00	国際交流委員会
5日（木）	11：00	監事会（第2回）
10日（火）	13：00	環境委員会
11日（水）	13：00	財政委員会
16日（月）	14：30	講演委員会（Zoom）
19日（木）	13：00	理事会（第7回）
19日（木）	15：30	広報委員会
25日（水）	13：00	東北委員会
27日（金）	13：00	諮問会（第3回）

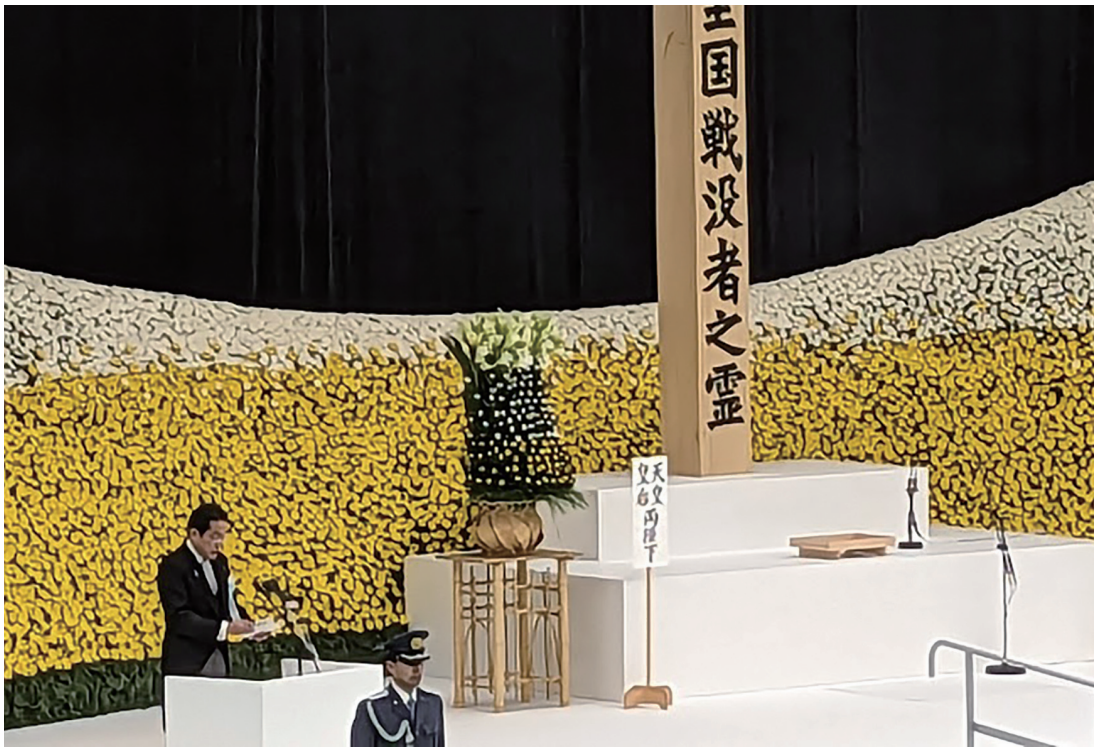
※下線は通常日程に変更あり。

【11月第1週の講演会予定】

2日（木）　14：00　公開 第18回対面＆オンライン講演会
「「質」の向上に挑む中国―その変貌を読み解く」
結城隆氏（エコノミスト、多摩大学客員教授）

ISSN0386-0345
二〇二三年（令和五年）十月一日・毎月一日発行
「善隣」第五四〇号（通巻八〇七）





発行所 〒一〇五-〇〇〇四 東京都港区新橋一-五-五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三-三五七三-三〇五一番（代表）

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION（IGNA）
https://www.kokusaizenrin.com